

地域情報（県別）

スタッフの質と協力がクリニック成長のカギ—パーキンソン病を抱えなお診療を続ける塚田攻院長に聞く◆Vol.2

2019年2月13日（水）配信 m3.com地域版

「患者の気持ちがわかる医師に近づいた」。「彩の国みなみのクリニック」（さいたま市南区：心療内科/精神科/神経精神科）の塚田攻（おさむ）院長は、パーキンソン病を抱えたことによる医師としての成長にこう手応えを感じるが、開業した当時は運営に苦労したという。患者から苦情を言われたり、スタッフが運営方針を理解してくれなかったり。困難な局面をどう打開していったのか。

（2018年12月27日にインタビュー、計2回連載の2回目。◆第1回はこちら）

—症状は徐々に重くなっているとのことですが、現在は？

最も目立つのは筋肉の硬直です。よく挙げられる体の震えはありません。筋肉の硬直は全身に及んでいて、顕著なのは脚。体を動かそうとしても思うように動かさませんから全体的に動作が遅く、物もつかみにくい状態です。ひどいときは寝返りを打てないこともあります。言語機能を司る筋肉にも影響しているので、滑舌も悪いですね。

パーキンソン病には精神的な症状を伴うことがありますが、私の場合は仕事を続けることができているのでひどくはありません。ただ、今までやれていたことがやれなくなったことを突き付けられたときは、やはり落ち込みます。

—過去、どんなときに精神的なショックを受けたのでしょうか。

印象深かったのは2年前のことです。クリニックの中で失禁しました。その前にもトイレに間に合わなくて多少の尿漏れを起こしたことはありましたが、その時は診療室の椅子が濡れてしまうほどでした。病気によって熱さや冷たさを感じる感覚が鈍くなっていたので、スタッフから椅子が濡れていることを指摘されて気付きました。

当時はスタッフにもきつく言われました。「先生は疾患の受容ができていない」と。「早くおむつをして車椅子に乗ってください」と。きついことを言うなあと思いましたが、スタッフの言うことも理解できました。様々な戸惑いや葛藤があり現実に向き合うのは楽ではありませんでした。結果的には病気を受け入れ、スタッフにも「（指摘してくれて）ありがとう」と言えるようになりました。

—発病により、患者との関係性も変わったのではないのでしょうか。

そうですね。心の距離が縮まったと感じます。患者さんが診療室に入ったときには「私は元気だけど先生はどう？元気？」と聞かれ、診療室を後にするときは「お大事にね」とお互いに励まし合う関係になりました。病気になる前には考えられなかったことです。

それに、患者さんの遠慮が少なくなったこともうれしく思います。薬が合わないことや薬を変えてほしいことを率直に語ってくれるようになりました。私が患者でもあるから伝えやすくなったのであろう他に、私の話しぶりが変わったことも影響しているのでしょうか。

病気になる前は患者さんに合った治療方針を心がけながらも、どこか自分の正しさを主張するような、説得するような響きを帯びていたように思います。今は「まずはこの薬を試してみて、合わなければ合うものを一緒に探していこうね」と提案するような調子になりました。

—病気を抱えながらの経営は簡単ではなかったのではないのでしょうか。

はい。開業当初は体調管理がうまくいかず急きょ休診にせざるを得なかったり、診療中に休まないといけなかったりしたことがありました。多くの患者さんは自分の状態を理解して許してくれるわけですが、中には「体調管理も医師の仕事。できないのであれば開業すべきじゃない」と冷たく言い放たれたこともありました。

スタッフとの関係もうまくいきませんでした。介助してもらうことがある手前、自分の要望を強くは言えないわけです。開業間もない頃は1日の来院数が10人程度で、この状況が続けば経営は成り立ちませんから、少なくとも20人は診療する必要があることを伝えました。しかしながらスタッフは、時間が余っているにもかかわらず患者さんの受診希望を断っていたのです。待ち時間が発生することによるクレームへの恐れを避けたかったり、自分が楽をしたかったりする気持ちがあったのでしょうか。

2017年にスタッフを替えてからは診療がスムーズに進むようになり、現在は1日の患者さんが30人を超えることも増えてきました。

——スタッフの質が重要だったんですね。今はどんなことに協力してもらっているのでしょうか。

診療人数などの経営的な目標を共有して、それに向かって努力してくれていることが最も大きいですね。現在は秘書1人と医療事務2人という体制ですが、彼女たちが様々なことに協力してくれています。

診療中に同席して電子カルテへの入力を代行してくれるほか、ホームページの運用や銀行回りなどの雑務も担ってくれます。今は電動の車椅子を使っているので移動に大きな困難はありませんが、状態が悪いときに車椅子から私を立たせてくれたり、尿瓶が必要なときに持って来てくれたりしてくれます。スタッフの中には介護経験のある人もいるので、こういった介助を上手にやってくれるのです。

いろんなことをやってもらっている無力感でつらくなるときはあります。しかし私に後ろめたさを感じさせないほど、明るく、強く振る舞ってくれます。とてもありがたいことです。「経営者」と「従業員」ではなく、家族のような関係を築けているのかなと。

——最後に、患者でもある医師としての振り返りと、読者に伝えたいことがあればお聞かせください。

病気になったことで、医師としての社会的な存在に疑問を持つことは今でもあります。しかし、健康であっても事故などによっていつ死ぬかはわからないわけですから、今を生きていくしかないと考えています。それに、病気になる前から「つらい体験から学ぶこともある」と患者さんに言ってきたわけですから、自分に生かすことは当たり前だろう、人間的な成長につなげないといけない、とも思います。まあ、自ら発奮させているところもありますが。ただ、病気になったことで先ほど話したような変化があったことは事実ですから、ポジティブな面をこれからも診療に生かしていきたいですね。



塚田 攻院長

医師に伝えたいことは、患者さんの気持ちをわかっているつもりでも、理解していないことが多分にあるということです。「自分は本当に患者さんのことをわかっているのだろうか」と、時々、見つめ直してもらえるとうれしく思います。

◆塚田 攻（つかだ おさむ）氏

1978年に慶應義塾大学医学部を卒業後、同大精神・神経科学教室に入局。翌年から現在まで埼玉県で診療を続ける。浦和保養院（現・聖みどり病院）に16年勤めた後は、埼玉社会保険病院（現・埼玉メディカルセンター）の精神神経科部長・心理療法室長や埼玉医科大学の神経精神科・心療内科講師を歴任。専門は性同一性障害。2004年にパーキンソン病の症状が現れたが、「医師としての自分を育ててくれた患者さんに恩返しをしたい」と2014年に「彩の国みなみのクリニック」（さいたま市南区）を開院。現在に至る。

【取材・文／医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

